

第 67 話 (56 頁) アリとハト

アリが小川におりてきました。のどか、からからだったのです。波がざぶんとアリをさらって、アリはおぼれそうになりました。ハトが小えだをくわえてとんでいました。見ると、アリがおぼれています。そこで、小川のアリに小えだを投げてやりました。アリは小えだにつかまってたすかりました。あるとき、猟師が網をはって、ハトをつかまえようとしてきました。アリが猟師に近づいて、足にかみつきました。猟師は「いたた…」と声をあげ、網をおっことしました。ハトはサッとまいあがり、とんでいってしまいました。

「以前、この話で 5 歳児保育の実習学生たちがベープサートをつくって、子どもたちに見せたことがあった。そのとき、一番反応があったのはどこだと思う？」

「……………」(みんな、顔を見合わせる)

「アリが漁師の足にかみついた場面だよ。『いてててて…』と漁師役が叫び声を上げたら子どもたちは興奮して、思わず、手をたたくほどだった。」

「うーん、なるほど。アリの必死の恩返しに拍手がわいたということか。」

「ハトも、アリも、打算とは無縁で、どっちも、助けたいという一心でとっさに動いた。無償の愛、に通じるよ。」

「同じ話は『イソップ寓話集』にもあって、岩波文庫(中務哲郎訳、235 話)だと、締めくくりは『一寸の虫も恩人に対しては大いなるお返しができるのだ』となっている。」

「やっぱり、教訓があると、崇高な恩返しも何か安っぽいね。」

「アズブカだと、アリがハトに助けられてから、逆にハトを助けるまでに『あるとき』と間がある。だから、ハトはアリの恩返しを知らなかったのではないか。イソップだと、連続しているから、明らかにハトも分かっていた。」

「そこまで読み込むと、ぐっと意味合いが深くなる。」

「WEB で探していたら、千葉県の話として、同じ題名で同じ話が載っていて、びっくりした。それも、パンメーカー(フジパン)のHPの中の『民話の部屋』コーナーにあった。なんでこんなところに、と二重の驚きだよ。」

「こっちは『むかし、あるところに蟻と鳩がおった』で始まり、休ませていたと、帰ったと、狙いがそれたと…と、聞き語り調で、『なにすっだ』と方言も登場する。そして、最後は『めでたし、めでたし』。なかなか味があるよ。」

「網を仕掛ける漁師が鉄砲撃ちに変わっているぐらいで、どう考えたってもとは一緒だ。」

「16 世紀に出た翻訳本の『伊曾保物語』にまで遡るのかな、勝手な推測だけど。それが、千葉県では民話として伝わっているとしたら、好奇心をそそられるなあ。」

「本論へ戻ると、『アーズブカ』には同じ恩返しがテーマの話がもう一つ出てくる。第 81 話『ライオンとネズミ』（64 頁）がそうだが、その比較は後に回そう。」